
掃き溜め

松嶋ネコヂロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掃き溜め

【Z-コード】

Z7218Q

【作者名】

松嶋ネコチロウ

【あらすじ】

僕らは決して掃き溜めなんかじゃない。僕らにだって幸せになる権利がある。僕にとっての幸せは豊海の笑顔だ。お前も同じだろう、豊海。

教室の扉の前で、僕はあの子の生首を持っていた。

僕はそれを豊海に突きだして見せた。

「助けに来たよ、豊海」

ようやくいじめっ子を殺せたことに、僕は歓喜した。

豊海は涙を零して、僕は笑った。

僕は下校中、必ずヘッドフォンで音楽を聴きながら帰る。いや、ヘッドフォンから流れる音は決して音楽とは言えないかもしない。

キーン。キーン。

絶え間なく吐き出される耳鳴りが僕の鼓膜を打つた。

これは悲鳴にも聞こえる。あるいは断末魔。背筋が凍る。

一昨年拾ったCD-ROMだ。

「こりしてやる」

必ず誰かが、最後にそう言つて終わる。

僕と豊海は掃き溜めの中で生まれた。

この掃き溜めに来る前にどんな所でどんな生活をしていたのかは覚えていない。

覚えているのは自分たちの名前と年齢と、それくらい。

ここで生まれたも同然だった。

僕たちは10歳だった。

周りには汚い肌を裸電球で照らしてにやける大人達。僕たちの飼

い主。

カウンター テーブルの木は腐りかけていた。多分漆塗りだとか防腐加工だとかはしていなかったから、大人達の飲むブランデー や梅干しや生肉で腐っていた。

臭いにはもう慣れてしまった。僕たちはいつも生ゴミのベッドで眠る。

傷だらけでくたびれた体を一日中そこに横たえて休んだ。その中の黒ずんだチキンの骨を掴んだ。僕と豊海もいつかこうなる。

ふいに豊海の髪を誰かが掴み上げた。

「余興の時間だ」

僕らはこの余興の時間のときだけ起き上がる。

部屋の真ん中に僕ら二人は転がされた。

さて、今日は。

「久しぶりに刃物いつちゃいますかーーー？」

誰かがそう言うと、下卑た歎声が上がった。

僕らの前に投げ渡されたのは鏽びた果物ナイフ一本。

急いで僕はそれを手に取つた。ぐずぐず躊躇しているボトルで頭をたたき割られてしまう。

ほぼ同時、僕らは果物ナイフを手に取つたけれど、立ち上がったのは僕一人だった。豊海の片足は折れている。

「大地ー！ 殺せー！」

名前を呼ばれた。名前を呼ばれるのも、もし今日耳が聞こえなくなつたらこれで最後だ。

目を潰されたら、この汚いブタ小屋を見るのもこれで最後だ。鼻を潰されたら、この吐瀉物のような臭いを嗅ぐのも最後だ。口を潰されたら、このクソ不味い生ゴミを食べるのも最後だ。いっそ、潰れてしまえばいいのに。

豊海がかろうじてテーブルに両手をかけて立ち上ると、大人達の反吐が出そうな声援が豊海に送られた。

僕は走った。

豊海に体当たりすると、彼女は呆気なく倒れて、僕は馬乗り状態になつた。

豊海の胸を刺そうと思ったけど、鎧びているからか上手く刃が立たない。

何度も何度も振り下ろしてようやく刺さつたけど、どうにも浅い。これじゃ豊海は死なない。豊海の悲鳴を無視して果物ナイフを捻ると、彼女はさらに悲痛な叫びを上げた。

大人達が手を叩いて笑つた。

もういいよ、やめよう。二人で死のう。ここで豊海を殺したら僕ももう用無し。豊海が死んだら、僕だって叩き殺されるんだから。掃き溜めの妹を殺して、掃き溜めの大人に叩き殺されて、掃き溜めの中で死ぬ。

僕らは掃き溜め。一生掃き溜め。

「ぎいい！」

そう、無様に叫んだのは僕。

激痛が走る太ももを見ると、豊海の果物ナイフが刺さつていた。驚いて尻餅をついたまま後ずさると、大人達がこれを接戦ととつたのか、一層歓声が高まつた。

豊海が上半身を起こして胸のナイフを引き抜こうとした。引き抜こうとしたけれど、途中で折れて、柄だけ抜けてしまつた。どつと笑いが起ころ。

僕も太もものナイフを引き抜いた。こちらは簡単に抜けた。

僕に殺されると焦つた豊海は、慌ててナイフの刃を抜こうと躍起になつっていた。

抜けるまで待つていたのが悪かつたのか、大人がイライラし出しているのが分かつた。今だに抜けない刃を掴んでいる豊海の後ろに、太つた大人が歩み寄つた。豊海はそれに気付かない。

「早くしろや餓鬼つ」

太つた大人が豊海の背中を蹴つた。

前から倒れた豊海の胸に、刃が深く突き刺さった。

「おえつ」

豊海が血を吐いた。かなりの量。昨日食べた豚肉の残骸も混ざっている。

喘ぐ豊海の背中を、太った大人の足が襲う。ぐりぐりと背中に乗せた足を動かすたびに

豊海はびくびくと痙攣を繰り返した。

僕は目を閉じた。今日で終わる。地獄の三ヶ月。

豊海が動かなくなつて間もなく、僕はトンカチで思い切り後頭部を殴られた。

僕は目を覚ました。あれからどれぐらい経つただろう。

ただそこは真っ暗闇だったので、自分が生きているのか死んでいるのかすら分からなかつた。

呼吸が苦しい。

何かに圧迫されて動きもとれなかつたけど、ちつとも動けないわけではない。

僕はもがいた。30分か、1時間か、それとも一日中か。

時間の感覚なんてなくなるほど、とにかく無我夢中でもがいた。

暗闇が怖かつた。

閉じ込められるのが怖かつた。

死ぬのが怖かつた。

何かを破る音とざらざらした感覚の後、右手が空気に触れた。外だ。上に外がある。

空を掘り進める。

どうやら僕は埋められたのだと理解する。

太陽の下、僕は状況をさらに把握した。

僕を圧迫していたのは虚ろな目をして丸くなつている豊海。僕は

豊海とともに「ミ袋に詰められ、土に埋められていたのだ。

見上げると天高くそびえる針葉樹林があつた。

ぱうっとそれを眺めていると、遠くから若い男の叫び声が聞こえた。

豊海が意識を取り戻したのは一年後のことだった。

その頃には僕の怪我はとっくに完治していて、僕は僕らを発見したサダナリという男のもとに引き取られて生活していた。

サダナリは優しかった。

乞食の僕らに対して家族のように接してくれた。

彼は独身だった。

豊海は記憶を半分なくしていて、言葉もまともに話せなかつたけど、徐々に話せるようになつていて。僕らには常識とか礼儀とかそういうものが無かつたけど、全部サダナリが教えてくれた。僕らは12歳になり、中学校へ通うことになった。

僕はヒーローという存在を知った。

僕らのヒーローは、僕らが14歳になると突如豹変した。

ある日学校から帰つた僕らは、開いている玄関を怪訝に思いながら、居間に上がつた。いつもはサダナリは会社に行つているはずだつたのだけど、今日は一人、ちやぶ台に缶ビールを置いてうな垂れていた。

「オレが、何したって、言うんだよ」

ひたすらそう呟いていた。

「どうしたの、サダナリ」

豊海がそう言つと、サダナリは剣呑とした目を彼女に向かた。よく見ると、部屋が雑然としていた。タンスや食器棚が倒れていて悲惨な状況だった。

サダナリがいつもの優しげな表情を作った。

「豊海、ちょっと寝室へ行こう。大事な話があるんだ」

立ち上がって豊海の手首を掴んだ。サダナリに導かれるままに、

豊海は寝室へ入っていった。

それから毎日、豊海はサダナリに犯された。

最初はベッドが軋む音くらいで、しばらく日が経つと豊海の悲鳴とサダナリの愉悦の叫びと肌を打つ音が加わった。

そういうとき、僕は決まってヘッドフォンで耳を塞いで目を閉じた。すると、自分が生きている感覚が失われるのだ。

ここに僕はいない。

そう感じられた。

しばらくそういう生活が続き、僕らは中学二年生になった。サダナリは堅実に貯めた貯金をギャンブルに費やす日々を続けていた。

その頃には、豊海がぐつたりしていたり風邪を引いて動けなくなると、僕が豊海の代わりにサダナリに叩かれたりするようになった。不思議と彼に対し殺意を抱いたことは無かつた。極わずかな憎悪くらいで。

多分過去と比べた結果の感情だと想つ。

僕らは高校に上がる。

高校では痣や傷のことと僕らは苛められるようになつた。

サダナリは、僕らの身体に痣や傷が残るのを見て悦楽を覚える。

そういう変態だったから、よく跡が残るように僕らを虐待した。

「ホント気味の悪い双子よね。あたしたちが何したってなんにも言わないの」

誰かがそう言ったのを聞いた。僕ら掃き溜めにとつて、抵抗とい

う文字はない。

そつやつて苛められ、虐待され、性的な暴行を受け、たまに休日は部屋に監禁されたりして、そういう日々を送っていた僕たちに転機が訪れた。

「大地。お願ひ、一緒に死にましょ」

豊海の言葉に耳を疑つた。自殺といつ行為、僕には理解できなかつた。

10歳の頃、あのブタ箱から出たとき、自分が生きていると感じた瞬間、幸せというものを知つた。生きているだけでいいのだと、そう思えるだけで僕は生きてけるのだと。

豊海も同じだと思つていた。

「私、一度あの子の家に行つたことがあるのよ」

あの子、とは豊海を苛める首謀者だ。

「遊びに来てつて言われて、もちろん言葉通りの意味じゃないわ。あの子の家で色々からかわれたりするのよ。実際そうで、あの子の部屋で、私は3、4人に玩具にされた。そのときね、私見たのよナリみたいなのよ」

「……何を？」

「他の子たちの家。初めて他人の家の敷居を跨いだけれど、びっくりしちゃつた。あの子の家族、みーんな、初めてここに来た頃のサダナリみたいなのよ」

僕は冷や汗が止まらなかつた。掌が汗ばんでぐしょりと濡ついていた。

「お母さんなんか常に笑顔で、紅茶やケーキを持つてきてくれて、食べていよいよつていうの。ケーキなんか食べたのいつ頃ぶりかしら。嬉しくつて嬉しくつて、慌ててかぶりついたら思いつきり笑われたわね。おじいちゃんがあの子の頭を撫でて、あの子なんて言つたと思つ?」『どつか行つて、うざい』だって。信じられない。あんな優しそうなおじいちゃんに頭を撫でてもらつて。それからね、どこのお部屋も、廊下だつて綺麗で、あの子の部屋には可愛いぬいぐる

みとか、面白そうなゲームとか、美味しそうなお菓子とか、化粧品とか、家族で撮った写真とか。[写真なんてみんな本当に]

「豐海」

「楽しそうに、笑顔で写つていて」

僕は部屋を見回した。

あるわけはない。僕たちは家族で写真を撮ったことはない。

そもそも眞に当たる家族と言ふのがすこい感じ

生きてゐる力にて體は益々弱くなり

「まあ、豊海の手首にくつきりと残る躊躇い傷の意味、やつと分かつた。
「テレビとか本とか、そういうのでは見たことあるけど、実際いる
のねああいう家族。リアルで、痛いほど実感しちゃった。なんてい
うか、普通で、本当に平凡なんだけど楽しそうで、幸せそうで」

「どうが！」

豊海が激昂した。ほとんど感情を露わにしない豊海が怒りで声を荒げた。

き出した

「叩かれて！ 每晩気持ち悪いことされて！ 煙草の火を押しつけられて、たまにご飯抜かれて、熱湯に無理矢理入れられて、水かけられて、教室で笑いものにされて、髪をライターで焼かれてお弁当ひっくり返されて上履き捨てられて犬のおしつこ飲まされて小さい頃なんて殺し合って怪我して病気しても治してもらえなくて他の子みたいに遊びにもいけなくて他の子みたいに頭撫でてもえなくて他の子みたいに抱きしめてもらえないくて他の子みたいに外食も旅行も行けなくて他の子みたいに親もいなくて他の子みたいに楽しく笑えなくて、それから、それから、他の子みたいに、他の子みたいに他の子みたいに他の

僕は豊海を抱き寄せるとい、彼女は何も言わなくなつた。

「誰にも抱きしめてもらえないなら、僕が抱きしめる」

「彼女は何も言わず、ただただ僕の腕の中に収まっていた。頭を撫でて欲しければ、僕がいつでも撫でてやる。一緒に写真を取る。サダナリが駄目だつて言つても無理にでも外に遊びに行く。ケーキが食べたいならお小遣いがなくても盗んででも持つてくる。笑いたかつたら、僕が笑わせてやる」

気付けば豊海は泣いていた。彼女が泣くのは初めてだった。嗚咽して、しゃくり上げて、鼻水を垂らして、17年分の涙をここで全部出す勢いだった。

「苛められたくないなら、僕が守る。サダナリから、クラスメイトから守る。だから」

「僕は怖がつていただけなのかもしれない。だから抵抗しなかつたし、何もせずにヘッドフォンをして蹲つていた。

手が震えた。本当に豊海を守れるのだろうか。

自発的なのか豊海につられたのか、僕も泣いていて、それからサダナリが帰つてくるまで一人で泣き続けていた。

その日、今日もサダナリは豊海を寝室へ連れていこうとした。

「あ？」

寝室の扉の前に立ち塞がる僕を見て、サダナリは間の抜けた声を上げた。

「どけ」

僕の肩を掴むサダナリの手を掴み返して、僕はサダナリを睨んだ。高校生になつて多少腕力が増した僕に畏怖したのか、それとも突然反抗した僕に怖じたのか、サダナリは舌打ちだけ残し、豊海の手を離して一人で寝室へ入つていた。

寝室の扉がしまった瞬間、豊海が僕に抱きついてまた泣き出した。今日は初めて知ることばかりだ。

彼女は毎日怖い思いをしていたのだ。

彼女は誰かに助けて欲しかったのだ。

こうして抱きしめれば安心して泣き出すのだ。

守らなければいけない。でなければ彼女は命を断つてしまう。

翌日、僕と豊海は違うクラスだつたけど、僕は昼休みに豊海のクラスに押しかけた。

ちょうど、豊海はクラスの女子に囲まれて何かからかわれていたが、僕が教室のドアを開けると皆驚いて僕を見ていた。

僕はづかづかと豊海の机へ向かい、彼女の手を取つて立ち上がらせた。

「場所変えて、僕と弁当食べるぞ」

クラス中あつけにとられていて、豊海も逡巡したが、やがて顔を綻ばせて頷いた。

「うわ……何あれ、ガチでシスコンじゃね？」

教室を出るとき誰かがそう呟いたが、僕らは気にしなかった。

僕らの日々が変わった。サダナリから豊海を遠ざけて、学校ではできる限り豊海と一緒にいた。

サダナリの干渉がしだいに薄れ、僕らを家に軟禁することが少なくなったので、僕らは外へ出掛けたりもした。街を見渡せる高台に登つたり、公園で子供のように遊んだり、自転車で一人乗りしてちよつと遠くまで出掛けたりもした。

僕は、彼女が楽しそうに笑えることを知った。

そんなある日のことだった。

深夜、僕はふと目を覚まして、なんとなく隣を見た。

和室で布団を並べて僕たちはいつも眠っているが、今日は隣に豊海が居なかつた。寝る前はいたはず。

嫌な予感を覚えて、僕はサダナリの寝室へ足音を殺して向かつた。

「 」

寝室の中から聞こえる物音に、僕は全身の血が沸騰しそうな気分を覚えた。

台所へ行き、包丁を手に取った。三本ほどあつた包丁の中で、僕は一番手入れされていなくて鋸びたものを選んだ。

あのときの感覚が蘇る。あのときと同じだ。違うのは、あのときは豊海を殺すために刃を持ち、今回は豊海を守るために刃を持ったということだ。

殺せると思つた感情は、あいつはここで殺しておかなければならないという感情に変わり、さらに僕を奮起させる。

殺す。殺す殺す殺す殺す。

気付けば僕はサダナリの寝室を蹴り開けていた。

案の定。サダナリが豊海に馬乗りになつていて。豊海は必死に抵抗していく、サダナリは拳を固めてそれを振り上げていた。

僕に気付いたサダナリは啞然として僕を見ていた。僕の手にある包丁を見て、顔を青ざめさせた。

そして、豊海が叫ぶ。

「殺してっ！」

本能が動いた。10歳のあの頃の感覚が戻り、更に僕の本能を高めた。

サダナリは慌てて豊海の上から降りて逃げようとしたが、もう遅い。僕の鋸びた包丁は、深々とサダナリのお腹を捉えていた。刺されたことに一瞬狼狽えるサダナリだったが、しだいに目つきが変わつていった。

「この恩知らずが……」

サダナリの細い手が僕の首にかかる。見た目以上に力がある。こんな力で豊海を襲つていたのだ、抵抗できるわけもない。頭がふわっと軽くなつて、視界が白みかける。

首を絞めてくる力を強めてきて、僕の喉からさらに息が吐き出された。次の瞬間、サダナリの後ろで、ハサミを持って振り上げる豊

海を見た。

「ぐえつ」

サダナリが潰されたカエルみたいな声を上げた。豊海がサダナリの背中にハサミを突き立てていた。首にかかった圧力が弱まり、僕が包丁を引き抜くと、サダナリはその場に跪いた。そのまま身体を引きずつて逃げようとするサダナリの右足を掴んだ。

「逃げるな」

アキレス腱あたりに狙いを定め一気に振り下ろすと、右足首の三分の一ほどに包丁は食い込んだ。サダナリの醜い悲鳴が上がった。包丁を抜き、左足首にも同じように振り下ろすと、サダナリは前めりにフローリングに倒れた。

サダナリが僕の足を掴み、懇願するように見上げてきた。

「見るな」

左目に包丁を刺した。また耳障りな叫び声を上げるサダナリ。引き抜くと、左目から白い液体が流れた。それでも僕の足を掴んでくる手を離さない。

「触るな」

サダナリの手首を掴み、何度も何度も刃で引き裂いた。お前も豊海と同じように手首を刻む痛みを味わえ。

「『めんなさい』するしてゆるじてゆるじで」

「喋るな」

サダナリの喉に包丁を突き刺すと、彼はまた「ぐえつ」とカエルじみた声を出した。ぴゅつ、ぴゅつ、と規則的に喉から血が湧き出てきて、サダナリがぐつたりとしだした。これくらいで死なせるか、と僕はサダナリに馬乗りになつた。

どれくらい経つだろうか。豊海が僕の背中にしがみついてわんわん泣いているのに気付いて、僕は我に返つた。

恐る恐る僕は下を見下ろした。

サダナリに馬乗りになつている体勢は変わらなかつたが、サダナ

りはぐちゃぐちゃの肉塊へと変わっていた。そこら中にサダナリの内臓が飛び散つていて、胃の中の胃液や溶けかけの食べ物の臭いが鼻をついた。

あのブタ小屋の臭いだった。
僕は掃き溜めに戻つていた。

あれから騒ぎを聞きつけた隣家の住民が駆けつけてきて、今だに僕に泣きつく豊海と、呆然と包丁を握る僕とを見て、最後にスクランブルエッグとなつたサダナリを見てその場で嘔吐した。警察が駆けつけたのはそれから20分ほどしてからだつた。

サダナリの虐待が認められたのはその日から1週間ほどしてからだ。隣人は虐待のことを知つていたらしい。ただ、黙認していた。しかし、僕の殺し方が異常を極めたことが影響したらしく、情状酌量の余地はほとんど無かつた。僕はすぐに少年院に入れられた。豊海はアパートで一人暮らしを始め、バイトをしながら生活援助を受け、今までの高校に通つた。僕は、彼女がサダナリをハサミで刺した事実は本人にも黙つていてもらおうとした。彼女は自分も殺したことを見つたとひたすら訴えたが、裁判所は僕を庇うための出任せだと言つたし、僕もその通りだと主張した。

もうサダナリはいない。僕は学校でも苛められないようだ、豊海に励ましの手紙を月に一度送つた。

彼女からも同じように手紙が来た。高校でうまくやつている、楽しく生活している、そんな内容だつた。

しかし、僕の不安がそれで収まるわけがない。

彼女が嘘をついていることなど容易に理解できる。だって僕らは双子なのだから。

彼女は人を殺せないことなど容易に理解できる。だつて僕らは何度も殺し合っていたのだから。

彼女は、僕にしか救えない。

半年後。

保護観察が終了した僕は、周りの監視が弱まつたことを確認して、少年院を抜け出した。

お待たせ、豊海。

今からお前を救いに行く。

僕は豊海の通う学校へ走った。

僕らは決して掃き溜めなんかじゃない。

僕らにだつて幸せになる権利がある。

僕にとっての幸せは豊海の笑顔だ。

僕は豊海の笑顔さえ見ていられたら幸せだ。幸せである僕が、掃き溜めのわけがない。

お前も同じだろう。

豊海。

教室の扉の前で、僕はある子の生首を持っていた。

僕はそれを豊海に突きだして見せた。

「助けに来たよ、豊海」

ようやくいじめっ子を、僕らの平穏の邪魔を抹消できた。

豊海は涙を零して、僕は笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7218q/>

掃き溜め

2011年6月11日13時40分発行